もどされて一刻館

キャメルクラッチ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
もどされて一刻館

【Ｎコード】
Ｎ８４４１Ｒ

【作者名】
キャメルクラッチ

【あらすじ】
人生をやり直す機会が与えられたなら？一度は幸せな余生を送るも、再び人生の転機になった頃へと戻された五代祐作。果たして彼は二度目の人生をどんな風に過ごしていくのか？これは一刻館を舞台にして新しく繰り広げられる物語。

プロローグ

――――あの時、違った選択をしていたのなら？

――――あの時、もっと頑張っていたのなら？

――――あの時、謝っていたのなら？

人間なら一度は誰もが仮定する『Ｉｆ』、過ぎ去ってしまった事象に対しての後悔や挫折。より良い結果を求める為にやり直しを思うのは不思議な事ではない。誰だって幸せや満足を求めて頑張っているのだから。

そしてこれは、有る一人の男性が体験する二度目の人生を描いた物語。

暗闇の中、何も見えず重力や方向感覚もない世界。寒さや暑さを感じなければ、人の気配も全く感じない広大な空間。まるで宇宙のように無限に広がる暗闇、男はそんな不思議な世界で意識を覚醒する。

その男は生前の名前を五代祐作といった。妻との間に一人娘の「春香」を授かり、順風満帆な夫婦生活と幸せな余生を過ごし、孫達からも愛されていた。

（ここは？）

俺は確か皆に見守られて幸せな老後を送っていた筈。

……いや、最後に大切な子供達へ「有難う」と、「幸せだった」と悔いを残す事もなく人生を終えたんだっけ。となるとここは死後の世界になるのか？真っ暗で何も見えないし、人の気配が一つもしない。

（……）

再びキョロキョロと周囲を見たすが何もない。

（なんて寂しい世界なんだ。これが死後の世界というのなら妻は、響子は大丈夫なのか？こんな空間で独り寂しく何年も過している？）

駄目だ！こんな何の光明もない世界で独りだって？駄目だ！駄目だ！駄目だ！ふざけるな！響子を独りで何年もこんな世界に住まわせていたなんて……、こうなったら直ぐに捜して逢いにいかないと！

歳甲斐もなく憤る感情。

（何処だ？何処に居るんだ、響子！！）

動かす肉体はない。それなのに意識だけになってなお、駆け出すように腕を振り、脚を蹴る錯覚を覚える。それはとても不可思議な

事なのだが、そんな事はどうでもよかった。

否、そんな些細な事に気を回す余裕はなかったのだ。

（居るなら返事をしてくれ！頼む、響子！！俺だ！祐作だよ！！）

もし流せる涙があったのなら、滝のように流れていたに違いない。果てしない自己嫌悪と罪悪感が心を覆い尽くすように、焦燥感に駆り立てられた姿で必死に呼びかけをする。

（くそ！一体何処にいるんだよ？お願いだ……、返事をしてくれ）

そして声が出ているのなら枯れ果てていたのかもしれない。そんな悲痛な叫びと悲壮な雰囲気を纏い、どこまでも力が続く限り思考の中で妻の名を叫ぶ。

（響子に、妻に逢いたいのかね？）

だがそこで予期せぬ返答が返って来る。

（！？――だ、誰だ）

何だ？今の声は男のようだったけど。俺の他にも誰か近くに居るって事か？それとも肉体がないから目に見えないってだけで、他の人も俺みたいに存在しているのか？

（……響子に、逢いたいのかね？）

だがその声はこちらの返事に応じる様子もなく同じ科白を繰り返

す。

（当たり前だ！逢いたいに決まっているだろ）

ふざけるな！もう一度逢いたいからこそ、こうやって捜しているんじゃないか！俺が一番愛した女性に悲しい思いなんてさせたくない。独り残されるのは何より厭だと、結婚の前には「自分より一日で良いから長生きして」と約束した。そんな響子を独りに出来るわけがないだろ！

八つ当たりをぶつけるように憤怒を込めた声でそれにがなりたてる。

（そうか。わかった、響子の事……）

初めて訊く声なのに嫉妬すら覚える安らかな声色。まるで妻の事を知っているかのように、全てを包み込む暖かい包容力で「――宜しく頼むね」と、その声は返事を返してきた。まるでその存在を自分は知っている、でも遭った事はない。

そんな不思議な錯覚を覚えた後にふと意識は消えて行く。

（あの声は一体誰だったんだ？）

（あれは……）

（一体……）

（……）

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

まるで夢から覚めたかのように、それこそ狐に化かされたかのような気分。白昼夢でも見ていたかのように茫然とした意識が覚醒する。先程の出来事は一体何だったのか？そんな不思議な体験から戻った場所には、スーツ姿の男性と下着姿の若い女性。更には背が低く丸っこい容姿の主婦が自分の周りをとり囲むように佇む。

（え？四谷さんに朱美さん、それに一ノ瀬のおばさんまで。しかも皆、初めて出逢った頃のように若い）

急速に覚醒する意識と湧きあがる衝動。

（まさか？……まさか、まさか？だとすると此処は）

甦る記憶と懐かしき思い出。

（一刻館なのか！？）

階段に座り込む俺のシャツを掴む四谷さんの姿？そうだ……、これは俺が模試の結果が最悪で一刻館から出て行こうとした頃だ。あの頃はまだ響子もいなくて、本当に居続ける意味がなかったっけ。実際、受験生が住む環境じゃなかったけど。

（と言う事は……）

ドクンと胸の高鳴りを覚える。確かこの後、前任の管理人に断りを入れようとして新しく現れた女性（ひと）。ここで俺は初めて響子と――

――――――

そしてガチャリと玄関の扉が開く音がすると共に訊き覚えのある声が流れてくる。一度たりとも忘れた事のない澄んだ声で。

「私、今日からこのアパートの管理人になりました。音無響子ともうします」

――――――――出逢ったんだ。

そう、若き日の妻の姿がそこにはあったのだ。

プロローグ（後書き）

え～と、つまり『めぞん一刻』の逆行物です。何故、五代君が逆行しているのか？そこは敢えてスルーして下さい。確かに神様の力によって逆行するのが一番自然なのは分っています。苦し紛れに言うなら「謎の声」＝「神様」という事に（汗）

ちなみに「謎の声」は原作に登場している人物設定です。

タイトルの由来は「ながされて藍蘭島」が元。

ＰＡＲＴ１　一刻館よ、再び

ここは一刻館で、俺は何故か過去に戻っている。しかも浪人生だった頃の身体と昔の記憶を持って。……よし、ここまでは問題ないな。ちゃんと鏡を見て確認したし、皆の反応から鑑みても９０歳だった頃の自分じゃない。実際、あの頃に比べて体力や気力も充実しているし、思う様に身体も動かせる。そして以前の記憶、響子とは８８歳に離別した。うん、記憶の方も問題ない。

とりあえずこうなった原因は置いとくとして、ここは五号室。俺が住んでた部屋で昔の記憶と何一つ変わらない。ロータイプの机に座布団と本棚が一戸だけのシンプルで他は鍋やヤカン程度、いかにも田舎から出向いて来た浪人生な趣。うわ～本当に懐かしいな。後は冬になると愛用していた炬燵くらいか？宴会部屋としてはある意味もってこいなのも頷ける。もう少し遠慮や思慮という言葉を考えてくれれば嬉しかったけど。

しかし――――……

「相変わらずですねぇ、四谷さん」

「おや？彼女、もうぐっすり眠っていますよ」

響子との再会の後、俺は現状を把握する為に一つ一つ問題を整理しているのだが、壁に穴の開いた部分からニュルっと蛇みたいに不法侵入してくる一人の男性。器物損壊をどれくらいしたか分らない下手人、四号室の住人である四谷さんだ。

彼は人の眼に臆する事もなくツカツカと目の前を過って勝手に押

し入れの中へと入っていく。そして徐に尻を見せた状態で語りかけてくる。それが人に話しをする態度かどうかはさておき、五号室の隣といえば六号室……要するに朱美さんの部屋になる。

つまり覗き穴で隣の部屋を見ているわけだ。本当に変わらない。この人にかかっちゃプライバシーなんてゼロに等しいからな。どれだけ泣かされたのか今でも克明に思い出せるよ、本当。

「やや！？面白い物が見えますぞ、全部丸見えですよ」

「どうでもいいけど、いつか訴えられますよ？」

「おや？どうしたんですか？いつもの五代君らしくもない」

「たまたまそんな気分になれないだけです」

まるで調子が狂ったと、覗き行為を止めた四谷さんが俺に問いかけてくる。

あ～驚いてる、驚いてる。確かに尻馬に乗って俺も覗いたりしてたからなぁ。今思えばそんな所が玩具にされてたのか。我ながら若いというか、青いというか、情けない。まあ、時期も時期だっただけに、変な妄想癖があったりナーバスになっていたもんね。今度は気を付けないと。

「つれないですなぁ～。折角、人が友情を分かち合おうとしているのに」

「まあ、こう見えても一応受験生ですから。模試も近いし少しは勉強をしないと」

「あっ！！」

背中から突き刺さる視線を無視して、机越しに窓を眺めているとふいに大声を出してくる四谷さん。相変わらず自分のペースに流れを持ちこむ手腕は老獪だなぁ。この人、本当に何歳(いくつ)なんだろう？結局最後まで年齢不詳な人だったから変に気になる。実は人間じゃなかったりして。

「今度は何ですか？」

「こんな場所にカップラーメンの買い置きが」

「食べても構いませんけど、食事が終わったら出てって下さいよ？勉強の邪魔ですから」

「五代君は冷たい。私がこんなにも心配してあげているのに」

押しても引いても反応が薄い為か、四谷さんも妙に食い下がって来る。この人を敵に回すと後が恐ろしいからな、とりあえず無難に話を進めとくか。俺も少し一人で考える時間が欲しいし。

「その割にはしっかりカップラーメンを食べているみたいですけど？……で結局、本当は何か用事があったんじゃないんですか？」

「ええ。実はですね、管理人さんの歓迎会を開こうと思いまして」

何時の間にお湯を沸かしたのか麺を啜りながら本題を語って来る。いや本当にどうやって沸かしたんだろう？この人の行動は全て理解の範疇を超えてくるよ。オマケにもう人の真横へ陣取って探るよう

な目で覗いて来るし。

「勿論、参加しますよ。僕達は同じアパートに住む仲間じゃないですか」

「……そうですか。分りました、五代君はマルっと」

相好を崩してシレっと語ると、それ以上詮索するのを止めてメモ帳に記していく。まさか四谷さんも、俺がタイムスリップして甦ってるとは思わないだろな。まあ、様子が変わった事には気付くだろうけど。今の俺ならこの人とも互角に……いや、やっぱりやめておこう。二階堂の二の舞は踏みたくない。

「で、肝心の日程は何時なんです？」

「今の所は明日の夜となっております。場所は未定ですので詳しい説明は明日にでも」

（うん、やっぱり狡い人だなぁ。どうせ僕の部屋でやる心算なくせに）

「何か？」

「いえ、よく食べるな～と思いまして」

「大変、美味しゅう御座いました。ではそういう事で」

うわ、もう居なくなった。立つ鳥濁さずというけど、四谷さんの場合はゴミだけはしっかり残していくし。三個もあったのに全部食べちゃってるのが恐ろしい。あのタカリ癖はちっとも変っていない

な〜。

（――――――――……でも、それも懐かしい…か）

「さて、とりあえず部屋の掃除と勉強はやっておかないと」

何せ明日は響子の歓迎会、この部屋に来るんだからね。やっぱりだらしない姿は見せたくないし、少しでも体裁を良くしときたいのは男の性かな？うん。今の自分ならあの頃と違って恥ずかしくない対応が出来るだろうから。頑張らねば！軍資金が寂しいのは仕方ないとして、プレゼント出来る何かを考える必要があるな。よしよし、気合い入れていくぞ。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

―　翌日　―

朝の通勤時間を少し過ぎ去った頃合い。飛び交う雑踏と戦場のような交通機関は一時の安らぎと静寂を残す。ほんの一時間前の人混みが嘘のような時間帯、早朝の八時といったらそんな時刻だろう。その一家の働き手が家を旅立った頃の閑静な住宅街に一台のトラックがエンジン音を立てて停車する。そして数人の男性が作業着を着て荷台を下ろす作業に着手していた。

「あ、引っ越し屋の方ですね？御苦労さまです」

「こちら一刻館で間違いありませんね？直ぐに荷物を入れますので少しの間失礼します」

手際の良い流れ作業で大きめの物から小物と要領良く運んで行く。

「ふふ、お願いします」

そして時間にして３０分程、全ての作業が終了した業者の人間はサインを押してもらうと、潮が引くように姿を消す。

「管理人さーん！本当に手伝わなくて良かったんですか？」

「あら？おはようございます。いえ、こちらは大丈夫ですから、お勉強の方を頑張って下さい。来年こそは合格するように」

「は、はは……頑張ります」

「？」

（あら？何か弱々しいわね）

管理人と住人の微笑ましい朝の挨拶、本来なら一日の始まりとして清々しい笑顔とシャキッとした姿がある筈だった。だが住人の男性は何故かダメージを受けたように、弱々しい表情を浮かべ挨拶を交わす。管理人さんでなくとも？を心の中で浮かべるのは仕方ないだろう。――尤も自分の発言に失言がなければ、の話しであるが。

―　Ｓｉｄｅ　Ｙｕｕｓａｋｕ　Ｇｏｄａｉ　―

「は、はは……頑張ります」

流石は響子、極普通に破壊力のあるジャブを浴びせてくる。そりゃあ、この頃は出逢って間もないし、何の恋愛感情も抱いていないかもしれないけど。こうも自然に失礼な発言を浴びせるのはどうかと思うぞ。本人は元気づけているつもりだろうけど、デリカシーがゼロじゃ逆効果でしょうに。

素敵な笑顔と悪意がないのも困ったもんだ。善意１００％だから怒るに怒れないし、苦笑いで返すのがやっとだよ。まっ、こんな事で気にしてたらやってられないけど。それより俺の記憶が間違いなければ、この後に覗き穴の修繕をする筈だっけ？よし、ならその間に買い物を済ましておこう。

「でも人手が必要になったら遠慮なく声を掛けて下さいね！」

「お気遣いなく～」

うん、やっぱり響子の笑顔は落ち着く。こう…心の琴線に響くっていうか、安らぎを感じる。一日の活力といっても過言じゃないなぁ～。あのモヤモヤが全部霞んでしまう破壊力、何度見ても反則だ。やっぱり一目惚れしてたのかも……

（本当に…本当に過去に戻って来たんだな、俺）

あかん、ジ～ンと来た。あまりの懐かしさに感動している場合じゃない。歓迎会の時間は夕方以降としても、買い物の時間を考えるとあっという間にタイムリミットになるからな。準備を済ませてさ

っさと行かないと。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

出勤時や帰宅時の時間ほど混雑はしないけど、それなりに人混みになる時間帯がお昼。昼休みになって外食なり、買い物なりと各々の時間が持てるからだ。当然の如く、駅前にはまばらだった人の数もそれなりに増えてくる。季節的には一月の風が冷たくあるが、幸いにも日差しが暖かく気温も上昇していたのだ。まさに人の活動を刺激するのにはもってこいのお天気日和。

―　時計坂駅前　―

「へぇ～。この辺りも昔のまま、何一つ変わっていないや」

見渡せば自分が使っていた駅の改札口に、立ち食い蕎麦屋、そして駐輪所までそのままの姿。若かりし頃の街並みがそのままの姿で出迎えてくれているみたいだ。街自体はそんなに大きくないから人の数もそこそこ、でも新宿等に行くのにも便利だったからそんなに不便は感じなかったっけ。

（さてと。とりあえず無難に手袋とかがいいかな？まだ親しい仲でもないのに、気取った物を贈っても微妙だろうから。それに季節的にもピッタリだ）

「とりあえず商店街の方から見て行くか。掘り出し物が何か見付かるかもしれん」

駅前からなら徒歩でも数分圏内、食料品から雑貨まで幅広くカバー出来るのは有難いな。お値段の方も高尚な物じゃないしね。まっ、この辺はローカルエリアだし、逆に高価な品揃えの方が違和感あるか。

「お？あの店なんて雰囲気もあって良いかも」

見ればカップルや女の子の比率が多め、中には買い物を済ませ笑顔で出てくる男女もいる。こういう店なら特に外れもないかな？男が一人で入店してもプレゼントの見積もりっぽいし。店員さんもお勧めとか見繕ってくれそうだ。

そして入店すると案の定、期待を裏切らない品揃え。俺の他にも一人で品定め中の男性が思ったより多い。昔は気付かなかったけどこんな店があったのか……結構、見落としていた場所もあるんだな～。ん、これなんか気にいってくれるかも。

ふと目にした手袋。その柄が可愛くて思わず手に取ろうとすると、

――――――――――え？

「あら？貴方もこれが気にいったんですか？」

（まさか？まさか……）

「こ、こず……、あ、あはは。えっと、君もこれを？」

「はい、見て下さい。これ、柄がすっごく可愛いんですよ」

そこ居たのは間違いなく彼女、こずえちゃんだった。まだ制服姿の女子高生、本当なら初めて出逢ったのは居酒屋でアルバイトをした時だったのに。あまりにも意表を突いた彼女に思わず名前を呼びそうになってしまう。だってこんな時期に出逢うなんて夢にも思わなかったから……。

でも狼狽しながらも誤魔化したのが功を奏したのか、こずえちゃんの方も気にはしてないみたいだ。というより手袋の方に意識がいってるから耳に入らなかったのかな？天真爛漫な雰囲気は健在だし。今思うとこの頃から独自のペースを持ってたんだなぁ。

「あ、なら僕は他のを見付けるから、君はこれをどうぞ」

「え！？でも……何だか悪い気が」

「いいよ、別に。これって決めてた訳じゃないし、他にも何個か気になるのがあったから」

「じゃあ……お言葉に甘えさせて貰いますね」

根が真直ぐなのか表情（かお）に感情（きもち）が表れる。少し申し訳なさを残して、その後に感謝の笑みを浮かべる性格（ところ）は最たる理由だろう。基本的に礼儀正しい子だし、お礼もしっかりしている。二、三のやりとりをした後に、クドくならないように好意を受け取るのは流石かな。ちゃんと頭を下げてから「有難うございます」のお礼まで残していくしね。

尚、この後は白を基調にピンク色の縞柄が入った手袋を購入した事をここに記す。

－　Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ　－

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

一通りの買い物を済ませると時刻は既に夕方、ポツポツと帰宅の準備に入っているサラリーマンの姿を見かける。やはり早めに買い物に出かけたのは正解だったかな？意外と時間の概念を感じなくなるものだから。収穫としてプレゼントはしっかり買えたし、後は渡す時に印象を悪くしない感じで頑張るだけ。……そんな模範練習を脳内でコッソリ繰り返していたのは昔の癖（なごり）なのかもしれない。ま、妄想が暴走しないだけマシってもんさ。あの頃は電柱に頭をぶつけたりしてたっけ。思い出すと我ながら恥ずかしくなってくる。

「っと、一刻館御到着。ん？あの灯りは……やっぱり僕の部屋でやってるな」

（やっぱりこうなるのね）

どうせなら人が帰って来るまで待ってくれててもいいのに、と心の中で付け足す事も忘れない。いいじゃん、細やかな抵抗って事で。

そして軽く溜息を溢した後に「ただいま」と玄関を開けてから、タンタンと階段を昇り、五号室――……つまり自分の部屋に入る。

「やや！？一体いままで何処に行っていたんですか？あんまり遅いので待ちくたびれて先に始めちゃいましたよ？」

「遅かったじゃないの～五代君」

「あんた、勉強してなくていいの？仮にも受験生でしょ」

「まあちょっと買い物に。で、この様子からすると会場は僕の部屋と？」

「あれ？言いませんでしたか。可笑しいですな～」

「珍しく察しがいいじゃないの」

「この部屋、一番荷物が少ないからね」

うん。皆、相も変わらず好き放題に言うね。仮にも人の部屋を会場にしといて、遠慮の『え』の字の欠片も見当たらない。逞しいというか、ずうずうしいというか、豪胆な人達だ。これが響子の歓迎会じゃなかったら帰って来るつもりなかったぞ。

「あの……浪人さんにご迷惑では？」

暖かいよ、響子。嬉しいよ、響子。……ただ、せめて名字で呼んでくれていたならもっと有難かったのに。

「なに、泣いてんのよ？気持ち悪いわね」

「おやおや？何ですか、その手に持っている包は」

「あ、これですか？」

災い転じて福となす。ふっふっふ、転んでもただでは起きませんよ、今の俺は。これで自然にプレゼントを渡す切欠が出来たってもんだ。下手にコソコソしてたら渡す事が出来なくなるからな。こういうのは堂々とするのが上作だろう。

「実は管理人さんの歓迎会も兼ねてプレゼントを買って来たんです。そんな大した物じゃないですけど、よかったらどうぞ」

「私に、ですか？」

よしよし！掴みは上出来、上手く意表を突けたぞ。何しろここの面子と来たら『強請（ゆす）り・強請（たかり）』が当たり前の意識だからな。何年もここで揉まれたら、そりゃあ打たれ強くもなるよ。それに響子だけでなく四谷さん達も、珍しく意表を突かれた顔をしているのが新鮮だ。あれ？もしかして、これってかなりレア？だけどそんな間はほんの一時。すぐに、

「へえ～、珍しいじゃない。あんたにそんな気配りがあるなんて」

「一体どうしちゃったんだい？五代君にしては本当に気が利くじゃないの」

何時ものペースに戻る。

「五代君はズルイ。一人だけちゃっかりプレゼントを渡そうなど」

「じゃあ、これは皆のプレゼントとしてって事で」

まあ、四谷さん達の仕返しも怖いし、今回は全員の総意って事でいいか。スタンドプレーは碌な目に遭わないし、要は響子が喜んでくれれば嬉しいんだから。変にシコリの残る空気にしたり、後味の悪い気持ちになったら本末転倒だろう。

「あの、開けて見ても構いませんか？」

響子のその言葉に皆の視線が注ぐ。

「ええ、気にいって貰えると有難いんですけど」

ちょっとドキドキ、やっぱり独りよがりにならないか不安を感じる。こういうのは気持ちだってのは解るけど、最初は少し緊張するなぁ。響子の事なら本当に嬉しいのか、相手の気持ちを無碍にしない為なのか見分ける自信はある。そういう思いやりを絶対に忘れない女性（ひと）だったのだから。

「これは…手袋じゃないですか、しかもこんな可愛い柄の」

「まだ寒い季節ですから外に行く時には使えるかな？って、思って」

「はい、有難うございます」

満面の見えを浮かべて謝礼を述べる、そこには心から感謝している響子の姿があった。

ＰＡＲＴ１　一刻館よ、再び（後書き）

五代君の性格としては最終回の成長した頃をイメージしています。基本的に初期の子供っぽい行動は名残程度として扱っていこうかと。そして好意全開で動いていますので、昔と同じ行動をとるよりは成長した自分として接していかせたいと思っています。未来が変わるとかより、「当たって砕けろ！」・「ガンガンいこうぜ！」みたいなニュアンスを想像して貰えると分り易いかも。どこまでも響子さんラブな男なのです、彼は。

ＰＡＲＴ２　奴の名は、惣一郎さん

ゆらゆらと湯気の立つマグカップ。そこから漂う芳しいコーヒーの香りが寛ぎの空間を齎し、暖房の温もりが一層に人の心をリラックスさせる。窓に映る１２月の冷たい景色と街を足早に歩く人の姿からもそれが引き立つ。一時の癒しを求め読書しながらカップに手を付ける者、恋人同士で愉しい語らいを興じる者、誰かと待ち合わせをする者、それぞれがこの室内で満喫していた。

「しかしよ～、来月には共通一次試験だっつうのに気合いが入らねえな」

「お前はどうなんだ？五代」

そんな喫茶店の一角で俺に語りかけるのは同じ予備校生仲間の二人。茶髪にパーマがかった坂本と眼鏡をかけた小林、いわゆる悪友で後々まで続く腐れ縁。誰でも一生の付き合いとなる友人がいるように、俺にとってはこの二人がそんな間柄。

「う～ん、まあボチボチかな。過去問題や苦手な教科の底上げもやってるから、そんなに悪いとは思わんけど」

口に含んだコーヒーを飲みほし、カップをテーブルにコトリと置いてから話す。……すると一気呵成に避難を浴びせてくる坂本（あくゆ）と小林（う）。

「なんだと！？貴様、何時の間にそんな真面目（ガリ）になりやがった」

「お前、この間まで一刻館は受験生の済む場所じゃないって言って

たろ？」

「お、落ち着けって。別に自信があるとは言ってないだろ？俺だって悩んでんだから」

「悩んでるだとぉ～？とてもそうは見えんな。割と余裕すらあるように見えるぜ」

「お前、何か変わったか？妙に落ち着いてる気がするんだが」

「俺に絡んでどうする？もう追い込みなんだから頑張るしかないだろう」

まさかこんなに反応されるとは思わなかった。俺ってそんな馬鹿に見えたのかな？少し傷つくが……、まあいいや。昔みたいに馬鹿ばかりやっとれんのだ。響子の為にも、何よりアイツがいるからな。今の内にしっかりしとかないと、とても太刀打ちできん。

そんな窘める科白にブツブツと文句を言いながらも引き下がる二人。情報の交換や途中経過の報告も兼ねているので、互いに刺激になったりと一応の効果はある。同じラインの学校を受験するのだから身近な存在はやはり気になるのだろう。口では悪態を着けつつも表情の方は自然と受験生のものとなる。多少の愚痴は愛嬌というものだ。

「とりあえずもう行くからな。クリスマスも近いしあんまり悠長な事はやっとれん」

実際、息抜きは必要だけど微温湯（ぬるまゆ）に浸っている場合じゃない。元々、利口な方じゃないから油断は出来んのだ。しかも一刻館となる

と確かに勉強の場所としては一抹の不安が残る。そう思ったから二人を残して帰る事にしたのだが、去り際に――――――

「女……か？」

「だろうな。そうか、道理で……」

――――――……という、二人の厭味と呆れが混ざった言葉を耳に残す事になる。コラコラ、俺がどうして責められないといかんのだ。しかも『裏切り者』扱いまでするのは止めてくれ。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

「――――――――――しな！！」

「――――――――――きゃん！」

閑静な住宅街の坂道を上っていくと一刻館、屋根に時計を飾る特徴的な二階部分が見え始める。あの時計はシンボルみたいなもので、付近の住人だけでなく初見の人にも目印となって親しまれている。まあ時間が１０時２５分を刻んだままなので意味はないし、建物自体も老朽化が進みお世辞にも立派だとはいえないのだが。それでも住めば都とはよく言ったもので、それなりに愛着も湧くものだ。事実、取り壊し騒動があった際には住人の皆も本気で心配していた。

……と、閑話休題。

その一刻館から大声で怒鳴り散らす声が外にまで響き渡る。

（あれ？一の瀬のおばさんの声だ。あんな大声張り上げてどうしたんだろう。しかも賢太郎の声まで。さては何か悪戯でもして叱られているのかな？）

「まったく。宿題もしないで遊びほうけて」

「ま、まあまあ。賢太郎君も遊び盛りな歳頃ですし」

「ただいま。二人共どうかしたんですか？」

「あら、浪人さん。お帰りなさい」

「あんたも暇そうだね。受験生なのにそんな調子で大丈夫なのかい？」

「ぐっ。仲間内で少し話しあってきただけですよ」

それよりいい加減に浪人さんは止めて貰わねば。昨日は歓迎会だったから特に突っ込まなかったけど、流石に連日はまずい。というか、人の名前を呼ぶ時に浪人さんは可笑しいでしょ。心配してくれる気持ちは嬉しいけど、ベクトルが微妙にズレてるのがなぁ。二人の思わぬカウンターに笑顔は絶やさぬも、少しだけ眉間に皺が出来るのは勘弁して下さい。

そこで改めて言いなおそうとすると、

「あ、あの管理人さ――『管理人さーーーーん！！！！！』……ん？」

「あのさぁ、悪いんだけど午後から雨が降るって。前の管理人が何もやってくれなくて雨漏りが酷いのよぉ」

「はい！わかりました」

二階の窓から顔を覗かせて叫ぶのは朱美さん。そうそう、昔はこれで美味しい…じゃない、不幸な事故があったな。そりゃあね？僕だって男ですよ？下心がゼロだった訳じゃないけど、助けようとしたのは事実なんだし何も本気で殴らなくても良かったのに。響子だって屋根で慌てふためくから危なく落ちる所だったんだからさ。

――――――――それにしても……あの感触は、

「あんた、さっきから何ボケっとしてんだい？」

「（はっ！？）え！？あ、あはは、さあ、気合い入れて勉強しないと」

「何だろうね、アレ？疲れるほど勉強している様にも見えないし、あの若さで耄碌してきたとかだったりして」

「それは流石にないんじゃ」

誤魔化す様にその場を後にしたら、やっぱり不審に思われたのかブツブツ言われてる。いかんな～、考え事に集中すると昔の癖が出てしまう。思わず甦った感触のせいで勝手に手が動いてしまった。それにしても耄碌はないでしょ？一の瀬のおばさん。まあ、確かに

長生きはしたけど……。いかん、いかん、今は気合い入れ直して勉強をせんと！

こうして五代は自室に戻り受験に向けて追い込みをするのだが――――――

カリカリカリ

「……」

静寂な室内に流れる文字をなぞる音。時折、ノートを開く音や消しゴムを使用した音もそれに混じる。行き詰まった感じもなく軽快に流れる筆記の音は順調のようで、机の上に載せられた問題集と辞典を交互に見開いて行く。時には赤ペンで線を引き点数のチェック、時にはケアレスミスがないかチェックを丹念に。

カリカリカリ

「……」

それを退屈そうに眺める隣の住人、四谷氏。彼が何故ここにいるのか？それは考えるだけ不毛、そういう男なのだ。兎に角、構う相手が面白くないと邪魔をするのが彼の特徴だろう。やはり黙っていられる筈もなく……

「――ときにですね、五代くん」

「なんですか？」

「君は何時からガリ勉君になったんでしょう？」

「暇なのは四谷（あなた）さん位なもんです。仕事、何やってるんです？」

牽制、いや少し意地の悪い光を宿してジト目を与える。え？そんなので四谷さんが動じるかって？そんなタマな分けないでしょう、この人が。暖簾に腕押し糠に釘、自分が不利になる事なんて一切白状しないって。真面目に相手をしていたら体の良い玩具にされるだけ。嫌がらせが生きがいみたいなタイプなんだから。

「それは秘密。おしえたげません」

案の定、シレっと舌をだして惚ける四谷さん。

「もう買い置きしてあった食糧もないですよ？全部食べましたから（あんたがね）」

「いや～実はですね、五代君に貴重な情報を教えてあげようと思いまして」

「貴重な情報？」

「ええ」

思わずピクっと反応する科白。いや、やっぱりどんな内容か気になるでしょ？判断するのは訊いてからでも遅くないし、おそらく四谷さんが俺にこんな事を説明する時といったら……

「実は管理人さんの事について少々」

やっぱり！昨日の晩に歓迎会でプレゼントを買って来た時、いや……響子が一刻館に赴任した時から薄々感づかれていたのかも。俺が響子の事を好きだって、――別に隠すつもりはないから問題ないけど、あの極上の玩具を弄る眼はちょっとなぁ。そして自覚してるだけに、気持ちを見透かされた感じで悔しい。

「分りました。明日の昼一食分でどうでしょう？」

「いや～悪いですね。何か催促したみたいで♪」

いやいやいや、あんた全くそう思ってないだろう！？寧ろよいネタを仕入れたと面白がってるな？くそう、何だか暫くは響子関連の事をダシにたかられそうだ。一刻館の住人は特にこういう方面の嗅覚が半端じゃない。

「ズバリ。管理人さんに、男の影がチラつきます」

「男？」

徐に腕を汲み反芻するように眼をつぶると、

「はい、何でも惣一郎さんとか云う名前の。これは賢太郎君と管理人さんが話している所を直接訊いたので間違いありません。いや～その時の彼女の瞳といったら、物凄く優しい感じでございましたよ」

ウンウンと頷きながらそれを語る。

「……惣一郎さん？へぇ～、一体どんな人ですか？」

「さあ？そこまでは私にも分りません。ですが、あの奥床しい管理人さんが口に出す位なんでしょうから、余程の男性と見受けられます」

――――――――ギシッ。

と、不意に天井から壁を叩く音と、埃が舞う様に振り落ちてくる。

「……確か屋根を修理してる筈でしたね、管理人さん。噂をすれば何とやらと言いますが、確かに雨漏りが酷いですから仕方ないかもしれません。」

「何ですか？その眼は」

「いえ……、天井は足下も滑り易いので無事だと良いのですが」

ジ～っと無言の圧力で語りかけてくる瞳。まるで放っておいてよいのか？と言わんばかりだ。まあ、確かに昔の事を鑑みると放ってはおけない。誰も居なければ屋根から滑り落ちて大怪我の危険があるんだからな。

「分ってますよ、ちょっと様子を見に行ってきます」

「はい。いってらっしゃい♪」

一通り人の事を弄って気が済んだのか満足気にハンカチを振っている。

（まったく。もっと素直に語りかけてくれると有難いんだけどなぁ）

一々人を引っ掛ける要素（例えば惣一郎さんの事とか）を除けば、満更悪い事ばかりじゃないか。考えてみれば一刻館で散々揉まれたから、人に騙される事もない強い人間になれた。いや……腐れ縁だけど生涯の仲間が出来たのも事実、少しは感謝すべきかな？叱咤激励をしてくれる人達が出来るんだから。確かにトラブルも多かったけど、

もっと素直な言い方をされると有難いのに。等と思いつつも一階の屋根の部分、ちょうど正面玄関に当る場所。そこにあった梯子使って二階へと上がっていく。自分の部屋が五号室だから、その辺りを真っ先に注視すると直ぐに見付けられた。

「管理人さん？風邪引きますよ」

（やっぱり寝てる。転寝とはいえ、よくこんな場所で眠れるな）

以前にも見た光景。響子が屋根の修理をしている最中にスヤスヤと眠りについている姿は変わらなかった。その無防備な様が往年の彼女、建前や社交辞令で見せる表情ではない、本当の彼女を思い起こさせる。

そして思わず彼女の名前を呼んでしまいたい衝動に駆られると――

――――――

「き、響…」

「惣一郎さん……」

寝言と共にポツリと流れる一粒の水雫。

「……管理人さん」

（まだ忘れられない、……違うな。そうじゃない、彼女の中では既に心の一部なんだから。正直いってやっぱり俺、貴方が羨ましいですよ。そこまで響子に慕われる貴方の事が。それでも、そんな響子の事を好きになった。この事実だけは何度生まれ変わっても変わらない、絶対に）

寝言とはいえその中に含まれた真意、それが胸の中を熱くさせる。

「管理人さん、起きて下さい！ほら、危ないですよ」

「ん…え？あれ、浪人…さん？」

「ふう、やっと眼が覚めましたか？ここ屋根の上ですから危険ですよ、こんな場所で眠ってると。それに遠慮しないで声を掛けてくれたら何時でも手伝いますから」

「あ……！？いやだ、私ったらこんな場所で」

恥ずかしい所を見られたと思ったのか顔を真っ赤にして横を向く。当人にしてみれば不覚以外の何事でもないのだが、足場の事よりそっちに意識が飛んでいたのが更なるうっかりを生む。住人から離れようと身体を動かした際に脚をとられ、背後に『つる』という擬音が見えそうな感じで盛大に滑ったのだから。

「きゃあああああぁぁぁ！！」

それに気付いて、しまった！と思ったのは後の祭り、悲鳴と情けなさが入り混じった微妙な音色で彼女は屋根から滑り落ちて行く。

「いわんこっちゃない！」

やっぱり最初から声を掛けて手伝うべきだったか？いや、今はそんな事を考えている場合じゃない！早く助けないと。結局こうなるのかといった後悔に似た感情が過るも、素早く響子の後を取って抱き込みながら共にズルズルと滑り落ちて行く。雨樋（あまどい）の部分で辛うじて止まったのは昔と同じ、まさに冷や汗ものだ。

「だ、だから、言ったじゃないですか、ここは屋根の上だって」

「す、す、済みません。つい、うっかりと」

こうして、すんでの所で事なきを得たのだが、状況が頂けなかった。一呼吸するにつれ冷静になっていく頭と現状、それは女性にとっては許し難く、男性にとっては幸せなハプニング。具体的に何が？等と、答え難い部分に男性の手が触れていたからだ。女性を象徴する二つの膨らみ。咄嗟の行動だったとはいえ、次第に湧きあがる感情を抑えるのは些か酷な事だったのかもしれない。何しろ２０代になりたての女性なのだから。

「あ……えと、その、これは態とじゃ」

まずい！？この震えは込み上げる怒りを抑えてる感じだ！響子の性格からして泣き寝入りはない。あの勝気な性格と怒った際の激昂ぶりは母親譲りの気性だから。

となると……

――――――――――――――――――――パアァーン！！

必然的に渇いた音が響き渡る訳で。

俺の左頬に大きな手形がついたのは言うまでもあるまい。

響子の去り行く後ろ姿を眺めた後、正面玄関の傍にある犬小屋に座りこむ。勿論、手ぶらじゃ失礼だし皿の中には食べ物も装っている。考えてみるとコイツと語り合うのはこれが初めてじゃないだろうか？まあ、響子の歓迎会から一週間ほどしか経ってないし、当然かもしれんが。

（ま～ったく、何も思いっきり叩く事ないのに。あれは事故だったし何より俺に落ち度はない、……筈。さり気無くあの感触を味わうのも、断腸の思いで諦めたと言うのに。少し酷いとは思わないか？）

「な？惣一郎さん」

「五代さん、知ってたんですか？惣一郎さんの名前」

ふと間に入って来る声、冷静さを取り戻し何時もの笑顔で語りかけてくる響子だ。しかし、含みの中には僅かな謝罪も感じられる。察するに先程のお詫び、そしてお礼も兼ね備えた感じだ。

「実は四谷さんから教えてもらったんです。でも、素敵な名前ですね」

「ええ、とっても。ね？惣一郎さん」

――――――――――バウッ！

そんな二人に共感するような感じの鳴き声があがった。

ＰＡＲＴ２　奴の名は、惣一郎さん（後書き）

やっぱり外せないビンタ炸裂場面。やや理不尽な感じですが、原作やアニメの響子さんってどことなく直情的な面もあるので引っ叩いてもらいました。御免よ、五代くん。

設定としてはアニメと原作の両方を取り入れる事にしました。その方がネタを考えやすいという理由もありますが、どっちの作品も好きだという作者の好みもあります。

ＰＡＲＴ３　恋のライバル？聖夜のプレゼント

―　１２月２４日　夕刻　―

一言でいうならクリスマス・イブ、街中の恋人同士にとって一年でも特別な日。ホテルや料理店の予約が殺到し、素敵なプレゼントを選ぶ姿がそこかしこに見受けられる。甘いスイーツやシャンパン、思い思いに豪奢な一日を過ごすのだ。それだけに街は活気づき人々の笑顔で包まれ、街並みもツリー等で彩られていく。これで雪が舞い落ちればまさにホワイトクリスマス、神様からの贈り物といっても過言ではない。この日ばかりは木枯らしに吹かれようとも、街を歩く人々の姿が多くなるのは当然の事であった。

――――――――――――――そんな活気溢れる時計坂商店街の一角で。

（クリスマスは公然とプレゼントを渡す機会、昔の轍は踏まないようにせんとなぁ。変に優柔不断な態度や煮え切らない言葉は逆効果。様は気持ちの問題なんだから）

「済みません。このブローチをお願いします」

「しっかし、マメだねぇ～お前も。そんな甲斐性のある奴だったっけ？」

ポケットに手を突っ込んだまま坂本がぶっきらぼうに声を掛けてくる。関心は薄そうだが俺がプレゼントを選ぶ事に意外そうな視線を向けていた。まあ、こんな事を頼むのは初めてだし、色恋沙汰を

持ち出したのが珍しいからだろう。実際ここまで浮ついた話題があがらなかったのも確かだけど……。

それはちょっと心外なので意趣返しとして厭味を込めて返しちゃる。

「ふふん。お前はき…管理人さんの素晴らしさを知らんから、そんな事を言えるのだ。大体、お前は少し節操がなさすぎるんだよ。腰を据えて一人の女性と付き合うと言う高尚な気持ちを持とうとは思わんのか？」

「ほほぉ～？人が態々付き合ってやってるのに恩を仇で返す訳かな？君は」

あ、額に青筋が浮かんだ。

（流石に一言余計だったか？）

口元の引き攣り具合、そして小刻みに震える身体と声色からも伝わる通り、明らかに怒りを抑えている。これ以上下手に刺激したら面倒な事このうえなし、まあ実際買い物に付き合ってもらった事には感謝しているし、何だかんだとコイツには世話にもなってるから素直に謝意と謝罪をしとかんと。

「わかってるよ、ちゃんと感謝してるっちゅーの。今度何かで埋め合わせしちゃるわ」

「最初っから素直にそう言えってんだ。でもいいのか、お前？もうすぐ受験本番だぞ、この時期に女に現を抜かしてる程余裕があるとは思えんが」

「別にプレゼント渡すだけだって。俺だってしっかり受験をクリアしてからアタックするくらいの分別はつけてるよ」

「ふ～ん……ま、それはお前が決める事で俺がとやかく口出す事でもないか。それより約束忘れるなよ？しがない浪人生には一食だって重いんだからよ」

ケタケタと軽口を叩いた後に「頑張れよ？」と励ましの一言を残し帰っていく。おそらくアイツのこんなサッパリした性格と、迷惑はかけつつも人の為に腰を折ってくれる御人好しな一面が生涯の付き合いになったんだろうな。

――――――よし！偶には何かリッチに御馳走でも奢ってやるか。店員さんからプレゼントを包装してもらった後、そんな殊勝な気持ちを胸に秘め、俺も足早に一刻館へと帰宅するのであった。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

「クリスマスパーティーですか？」

「そ。二千円で飲み放題、食べ放題。それに集まるのはうちわばっかりだから気が楽よ」

「そうですね…、たまには羽を伸ばすのもいいかしら」

「きっまり～♪じゃ、管理人さん、これ券だから」

（本当、アレから遊びに行くなんて久しぶりね。あの時は私もそんな気持ちになれなかったし、何よりそれどころじゃなかったもの。そう考えると少しは落ち着いてきたのかしら？少なくともこうやってパーティーに顔を出すくらいには）

「お？浪人じゃない、いま帰り？」

「朱美さんこそ、こんな処で管理人さんと一緒に何してんです？」

見れば犬小屋に名札を縫い付けてる最中の響子と、余所行きの私服に着飾った朱美さんが玄関の前で何やら語り合っている。二人共愉しげな表情からすると、どこか遊びに……いや、もっと踏み込んで……！！あ、そうか今日はイブ、とするとこれはパーティーの件あたりかな？確か『茶々丸』って朱美さんの勤め先だし、あそこでなら親しい人達がよく集まって親睦会とかやってたもんな。

「はい、実はクリスマスパーティーでも行かないかって」

「あんたもウチの店来る？男は三千円、安いよ～♪」

「じゃ、お言葉に甘えて」

ピラリとお金を差し出すと思いのほか朱美さんが戸惑い顔になる。彼女にしては実に珍しい表情といった感じで、逆にこっちの方が驚くというか調子が狂う。

「……」

「なに呆けてるんですか？僕も参加したいんですけど」

「……いや、あんたの事だから勉強があるとか、追い込みだと言ってゴネるんじゃないかと思って。なに？熱でもあるじゃない？こんなに素直だと返って不気味だわ」

「朱美さん、それはちょっと言い過ぎじゃ」

「管理人さーん！！」

その間の抜けた空気を突如破るかのように、子供の声が大きく響き渡る。この一刻館に於いて子供と言えば一人、一の瀬のおばさんの息子賢太郎しかいない。ドタドタと走りながら頭上に大きな包を抱えて響子の元へ駆け寄っていく。うん、子供の内はこのくらい元気があった方がいいかな？その毒気を抜く勢いはテレや見栄を感じさせない。

「はい！クリスマスプレゼント。何も言わずに受け取ってくれよ」

というより何処でそんな科白を仕入れてくるんだ、お前は？歳に似合わずマセているんだよな、コイツ。

「これを私に？」

「うん！俺、管理人さん大好きだもん！」

少し眼をパチクリして驚くも、その後で荷物を大量に抱える一の瀬のおばさんが立っている。つまりその時に買って貰ったか、福引か何かで手に入れた物だと分ったんだろうな。直ぐに笑顔でその返事にお礼を言っている。

「ありがと。私も賢太郎君、大好きよ」

――――「うわ～い！」と、その喜びを身体全身で表現し、はしゃいでいる。ある意味子供の特権なのかな？好きも嫌いもストレートに出せるのは今の内だけだぞ、賢太郎。大人になったら露骨な態度はそう簡単にはとれんのだからな。

「じゃ、あたしは仕事に行くから。店で待ってるわね」

「あ、今晩は宜しくお願いしますね」

「なになに？何かあるの？俺も行く！」

「ふふ。実は今夜はクリスマスパーティーがあるの、賢太郎君も行く？」

「絶対に行く！だって管理人さんも参加するんだろ！？」

「あんたもどうせ参加するんだろう？だったら皆で一緒に行かないかい」

「ええ、僕もそうしようかと思っていたので。それにしても賢太郎君、管理人さんに凄く懐いてますね」

「何言ってんだい、あんただって同じ口なんだろう？子供と張り合うなんて見っとも無いよ」

「う～む」

別に張り合っている訳じゃないんだが……やっぱり少し悔しい気持ちもあったのかな？というか相変わらず鋭いなぁ、人の気持ちを察するのが上手いと言うかなんというか。ここは流石一児の母親、心の機微を上手く掴んでる気がする。それに妙な所で世話焼きな一面があるし、羽目外しやすいのはどうかと思うけど、何だかんだで頭が上がらないな。

「そんなつもりで訊いたんじゃないんですけどね。おばさんもあまり賢太郎に変な醜態みせない方がいいですよ？子供心に傷つくし、あれでしっかりしているのは母親譲りなんですから」

そう返した瞬間、バツが悪いのか誤魔化すように笑いながら賢太郎を連れて一刻館の中へと入っていった。やっぱり本人も自覚あるんだろうなぁ、酒癖の悪さとか……。

「ふふ、何だか羨ましいですね。賢太郎君も、一の瀬さんも」

「まあ少し羽目外しな面もありますけど、あれで中々しっかりしていますしね。キツイ所があるのも、親心ってやつじゃないですか」

「あら？五代さんって子供好きなんですか？少し意外ですね」

そりゃあ俺だって人の親をやってたし。自分の手で子供を育てる事の苦労や喜びも経験すれば、本気で嫌っているのか愛情があるのかの違いは区別がつくつもり。それに賢太郎もこんな環境で苦労しているし、少なからずコンプレックスを抱えてるのも共感できるからな。差し詰め今の状態だと弟って気持ちなのかな？まあ少し生意気な感じではあるが。

「――……ん？」

「五代さん？」

「え？」

「もう、急にどうしたんですか？何やら神妙な顔つきで黙りこんで」

「…はあ、ちょっと昔を懐かしんだというか……あ、じゃなくて仲が良くて本当に羨ましいなぁ～って、あ、あは、あはは」

「？」

おっとっと危ない、危ない。つい昔の記憶に浸ってセンチになってたかも。

「それより！折角だから皆で会場まで行きません？朱美さんのお店だから『茶々丸』で集合でしょう。管理人さんもまだ来たばかりだし、周辺の道案内がてら揃って行った方が間違いないと思いますけど」

「そうですね。じゃあ会場まで皆さんで一緒にという事で」

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

―　ＳＮＡＣＫ「茶々丸」―

一刻館の住人、六本木朱美が務めるスナックバー。地域住民との交流は良好、地元密着型でマスターは草野球チームを持つなど、お店の雰囲気は明るく常連客で賑わっている。勿論一刻館の住人にも馴染み深く、一の瀬氏に四谷氏は常連といっても間違いない。また、同じ商店街の人達にとっても親睦を温める大切な場所でもある。まさにクリスマスパーティーの会場としては、これ以上ない最適の場所なのだ。

そんな会場の中に一際大きな叫び声。

「あーー！？こら、手をどけろ！！管理人さんは俺と結婚するんだぞ、気安く触んな！」

お酒の場の無礼講、そんな気さくな雰囲気に紛れチャッカリと響子の肩を触っていた四谷さんに賢太郎の一喝が響く。よし！いいぞ賢太郎、アレは俺も許せん。俺が同じスキンシップをやったら軽くセクハラ扱いだが、子供（おまえ）には許された特権かチクショウ。だが響子に触る野郎どもは勘弁ならんからな。ここだけは全面的にお前を指示するぞ。

そして便乗するように周囲からも、

「おーいいぞ、いいぞ！」

「なかなかお似合いじゃないか！」

「なんだなんだ？修羅場勃発か？」

「男だね～」

「キスはどうした～ここで夫婦宣言したらチュウもやったれ～」

などと野次が飛び交う。

もう殆ど見世物扱いだな。酒の肴に最高、こういうのは酔っ払いにとっちゃ良い喜劇みたいなもんだから当たり前か。まあ響子も満更悪い気はしていないみたいだし、いいのかな？賢太郎の場合だとどう見ても弟、いや…アイツの背丈からして下手すれば息子くらいの微笑ましさしか感じられん。

「あんたは参加しないの？」

「あの雰囲気を壊せっちゅうの？無理いうな」

「ふむ。それは少々意外でしたな、私はてっきり五代君の方がアクションをとるとばかり思っていましたので……」

響子と賢太郎のやりとりを傍で生暖かく見守っていると横から朱美さんの声が入る。いや、それと共に四谷さんも。一の瀬のおばさんは……、カウンターで蟒蛇（うわばみ）になってるよ。ありゃあ賢太郎も苦労するわな。とりあえず喉を潤す為にコップのジンジャーエールをグイッと口に含んだ後、一呼吸間を置いて忌憚なき本心をポロリと明かす事にした。

「そりゃあ俺だって妬ましい気持ちがゼロって訳じゃないですよ？ただ、響…管理人さんのあの笑顔みたらね。変な邪魔を入れるのも野暮じゃないかって思えてきて。こんな時くらいは皆で楽しんだ方が盛り上がるでしょ」

「こりゃあ重傷だわ、あんたの口からそんな殊勝な科白が出るんだ

から」

「まったくですな。そんな五代君などちっとも面白くありません。一体どうしたというんです？ここ最近の貴方は以前とはまるで別人みたいですよ」

「あんたらなぁ～。別に少し空気読んで自重しただけでしょうが」

「それが異常だって言ってんのよ、あんたにそんな芸当が出来る分けないじゃない」

「同感ですな。君はもっと妄想逞しい変質者だったじゃありませんか、そんな人並みの思考は持ち合わせていなかったはずですよ」

ぐわ～そこまで言うか？普通。ていうか誰が変質者だ、それはそっちの方でしょうに。さんざん人のプライバシーを侵害するわ、物は物色して持ち去るわ、挙句部屋の壁まで壊す人に言われたくないわい。朱美さんだって人前でも平気で下着姿のまま歩き回ったりしてるくせに。少なくともそんな人達に常識云々を問われたくないっちゅーの……。

「――はあ、別に良いんですけどね。それより会費は払ったんだから、その分はしっかり元を取っちゃる」

「お？良い飲みっぷり」

「仕方ないですな。我々も盛大に飲み明かすとしますか」

――――そして、

あっそ～れ、チャッカポッコ、チャッカポッコォ～～。

バックにそんな定番のＢＧＭが流れ、三人の蟒蛇（うわばみ）がここに降誕する事になった。それはまさに宴会人の魂ともいうべき乱痴気騒ぎと、底なしの酒豪によって一本…いや一滴残らず全ての飲み物が残らなかった事を此処に記す。そして後に残されたのは瓦礫の山と化したゴミと、見るも無残な死屍累々の有り様であったそうな。

「ぷっ、ふふ」

「あれ？何か変な事いいました、僕」

「ううん、そうじゃないんです。久しぶりに羽を伸ばせたからつい」

帰りの坂道を登りながら響子がふいに笑い声を溢す。その背には賢太郎を背負い、普段は見せない柔和な笑みと、芯から嬉しそうな口調で。

「ただ賢太郎の寝顔を見ていたら、本当に一の瀬のおばさんとそっくりだって」

「あら？それじゃあ賢太郎君も一升瓶を枕にして将来は育つのかしら」

「……っぷ」

血は争えないっていうか、その光景に違和感がないのは恐ろしい。

まあコイツの事だから反面教師に絶対そんな事はしないだろうけど。というよりコンプレックスの一つだからな、同じ醜態を晒すのだけは絶対に抵抗あるだろうね。ただ母親似な風貌のせいか、そういう光景に納得できるのも不憫なもんだ。

「管理人さんも意外と人が悪いですね」

「ふふ、五代さんの方から振って来たのに」

そんな仲睦まじい会話にふと割って入る白い塊。

「初…雪……みたいですね」

「本当、綺麗」

夜空を白色の雪が埋め尽くすようにチラチラと降り始め、イルミネーションのように淡い明かりを周囲に照らす。図らずもホワイトクリスマス、聖夜の素敵な贈り物としてこれ以上のものはなかった。別に雪を期待していた訳じゃない。だけど今度は絶対にプレゼントを渡すと決めて買ったブローチ。出来すぎと言えるこの状況で先程の軽い口調と顔を改め、真面目に響子を見詰め直す。

「管理人さん」

「はい？」

その雰囲気に響子も先程までの砕けた感じを払拭して、俺の事をじっと直視する。それに合わせて俺も右ポケットに仕舞っていた包をそっと出し、

「渡すのが遅れましたけど僕からのクリスマスプレゼントです。普段から一刻館の仕事を頑張ってくれる管理人さんに感謝の気持ちという事で」

「これを……私に、ですか？」

「ええ、そんな大した物じゃないですけど、それにこの気持ちはきっと僕だけじゃないと思いますよ」

賢太郎を背負っているので手渡しこそ出来ないものの、自分の気持ちが伝わったんだと思う。それに込められた思いが本物なら無碍にしないのが響子の優しさだから。言葉を伝えた最初だけ少しの戸惑いを見せたけど、嬉しさ半分驚き半分といった感じで最後に一言だけ返事を返してくれた。

――――――――――――――――――――ありがとうございます、と。

ＰＡＲＴ３　恋のライバル？聖夜のプレゼント（後書き）

という訳で久しぶりの更新はクリスマスネタとなりました。些か時期外れのネタや執筆意欲の低下というコンディションもあり、当初の目論見より大幅に遅れたのは我ながら失策だったと思います。ただ理想としては月一くらいの更新が自分にとっては丁度よいペースだというのが本音だったりもします。今回のは原作でブローチを渡せなく歯痒い思いをした五代君のリベンジという事で、どうしても渡してやりたいというのが外せなかった理由だったんです。

ＰＡＲＴ４　縁は異なもの味なもの（前書き）

今回は短めですが区切りがついたので更新。
それと登場人物の独自解釈もあるので、印象が違っても軽くスルー
してもらえると幸いです。

ＰＡＲＴ４　縁は異なもの味なもの

年は明け、昭和５６年１月９日。

青少年達が俄かに落ち着きを失う……。

そう、受験生達にとって人生を左右する試験が間近に迫っていたりするのだ。

泣くも笑うも、ここが正念場。

共通一次試験という難敵に対しこの一年間みっちり努力してきた成果をぶつけ、合格という旗印を掲げ凱旋する事が受験生に課せられた責務であるのだが……、悔しい事に俺の場合はどう考えても時間が足りなかったりする。というのもいきなり浪人時代に戻されて充分な時間がとれる訳がない。

――――したがって……。

（ふう、ボーダーラインがギリギリというのも辛いよなぁ）

徹底的に過去問題のチェックと文法や単語の基礎は抑えた。それに一度は受かった大学、本命がハッキリしているのはぶれなくて助かる分けで。ここは変に欲を出して高望みするよりも確実に絞っていこう。少なくともあの頃（むかし）に比べて絞るべき範囲と方向は決めているんだ。上を目指せば無理があるけど、自分がやりたい仕事がハッキリしている今は志望する学部も職種も決められる。何よりあんな不甲斐ない思いは一度だけで充分だ。

「……頑張らないと」

思わず異様に重い周囲の中でポツリと小声が零れる。

チラリと周囲に視線を移すと、カリカリと文字をなぞる音に、消しゴムの擦る振動。そして教材やノートを捲りながら溜息を溢す雑音がそこかしこから拾い取れる。余裕綽々で順調に勉強が捗っている者、問題に躓いて首を捻っている者、と状況はそれぞれといった感じだろうか。

そう、少しでも勉強の効率が上がるよう図書館で勉強をしていたりするのだ。

（みんな、気持ちは同じなんだよな）

ある種の仲間意識、共感から思わず左手で頬杖づいて、右手で鉛筆はトントンとノートを叩いてしまう。だが得てしてこういう行為は周りから見ると不愉快な音になってしまうもの。正面に対峙する女子学生がジロリと痛い視線を向けてくる。

（おっとと、集中、集中！）

この公式は絶対に抑えて過去問題と照らし合わせて覚えておくか。だとすると数字や配置をずらして、応用にも対応できるようにしとかないとな。途中の計算ミスにも注意して形だけでも慣れておくと解きやすくなる。まずは確実に解ける問題と部分を底上げしておくか。そうすれば他の問題にも時間を割く事ができるし。

（……）

「……」

（……）

「……」

（え～いっ！鬱陶しいわ、何だ？さっきから此方の方をジッと見やがって）

鉛筆を握る指に力が入り、思わずボキッと折りそうになる。もしかして先の事をまだ根に持ってんのかな？目付きが悪いというか、視線が鋭いというか、愛想のない女。でもその割に整った顔付きやショートの黒髪は凛々しさを感じる。普通にしてれば寡黙な美女って感じなのに勿体ない。

（しかし何だろう、この感覚。前にも一度身に覚えがある……どっかで感じた視線。はて？）

既視感ともいうべく何かを感じるのだが、とりあえず気になって仕方がないので声を掛ける事にした。こんな状況が落ち着いて進める事も出来やしないし、変な言い掛かりでも付けられたらかなわん。さっさとハッキリさせておくべきだろう。

「……あの、何か？」

「別に。ただ随分と余裕がありそうだなと思って。よかったら一緒に問題解いてみないかしら？一人よりも二人の方が効果も上がると思うのよね。お互いの癖や読解力って何かのプラスになるかもしれないし。ひょっとしたら自分の苦手な部分を補う事になるかもよ？」

人の意など解さないようにシレっと応え返す女性。だったら空気が詰まるように無言で此方を見るのは止めてくれよ。そもそも相手にストレスを与える態度ってどうなの？初めからそう訊いて来れりゃいいのに。

（ただ、確かに相手の言い分にも一理あるんだよな）

う～む、同じ問題でも他人の解釈や回答傾向を知るのは役に立つ。それに苦手な部分を補う事が出来るのも助かる。少なくとも自分の周りでは相互回答する相手が圧倒的に少なかったし、一刻館では人に教わるって環境じゃないからな。

見た感じそんなに要領の悪そうな人にも見えないし……。

「……まあ貴女がそれで問題ないというのなら。でも却って効率が下がる事だってあるかもしれませんよ？」

「その時はまた一人で勉強し直せば問題ないわよ。物は試しというじゃない」

（随分と強引なやっちゃなぁ。まあ、相手のその気なら割り切ってやれない事もなし。むしろ気が楽か）

「じゃあ、ちょっとだけ一緒に問題解いてみます？」

――――決まりね。と言わんばかりに即座に行動に移る強引さ、そして勉強じゃない他の事で共同作業を体験したような感覚。だが思いのほか行き詰まる事もなく、進捗具合も順調に進み目的だった部分は全部終わる事が出来た。こう言っては意外だけど彼女の淀みない説明には本当に無駄がない。少なくとも人に教授するという側

面ではかなり向いているし、何より科学や数学の回答がかなり為になる。逆に現国などの抽象的な問題は苦手なのか、前後の解釈にやや欠けている感じだった。

相手の女性も収穫を感じたのか無愛想な表情ながらも何も文句を言ってこない。基本的に復習となる個所が多かったのか、基礎となる部分や穴埋めの問題、それに教科書の見直しも兼ねている。最も幸いだったのは互いの学力に差して大きな違いがなく、回答後の読解にリズムが乗った事。ここに開きがあると温度差が生まれ、直ぐに結論が出ていたと思う。こうして概ね持参の問題集が終わった頃、帰り仕度をしながら女性が不意に今迄と違う事を尋ねて来た。

「そういえば貴方、名前は？」

「五代、五代祐作っていうけど」

「そう、あたしは黒木。黒木小夜子、貴方とはまだ何処かで会う気がするわ。じゃあね」

「……あっ！？」

その名前を訊いて一瞬、茫然とする他なかった。言われてみれば覚えのある声と目付き、何故今迄気が付かなかったのだろうと。そんな鳩が豆鉄砲を食らったように呆ける俺に気付く事もなく、彼女は足早にこの場を去って行った。まさに縁は異なものとはこの事である。

（道理で。ていうか黒木さん、高校生の頃はショートヘアだったのか。それに煙草を吸ってないから結び付かなかったな）

そして本日二度目の驚愕が訪れる事を、この時の俺はまだ知る由もなかった。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

黒木さんとの思わぬ再会。いや、初対面となる邂逅を果たした後、外はもう真っ暗だった。夜の冷たい風が頬を撫で贅肉の付いた気持ちを凍らせて行く。それは気を引き締め直せと言わんばかりに、温く火照った体温を低下させる。一刻館までの帰りの道程で冷静に今日の出来事を振り返ると、予想外な再会と結果として実り多き復習になった事。それは明日からの受験に対して少なからずの自信と、気後れしないで試験に望める心意気に繋がった事だろう。

自然と帰宅時の玄関を潜る手も力強く、声にもメリハリが効く。

「ただいま～」

（さ、残りは軽く目を通して早めに睡眠でもとっとくか。体調不慮で駄目でした～なんてなったら笑えんからな。一刻館でも流す程度のチェックなら問題ないだろうし）

軽く鼻歌交じりの気分で靴を脱いでいると、パタパタと管理人室から響子が顔を出してくる。その軽快な足音からは何か朗らかな気配、明らかに機嫌が良い雰囲気だ。これは何かあったのかな？とニコヤカに会釈を交わし、出方を窺っていると思わぬ反応が返って来た。

「お帰りなさい、五代さん。今日は貴方にお客さんが来てたんですよ」

（お客？誰だろう、坂本か小林でも来てるのかな）

その弾けるような笑顔に珍しい事もあるなと思い、誰ですかと問いかけた瞬間、ある人物と視線が交錯する。真っ白な白髪で一の瀬のおばさんより一回り小さな体躯、着衣には着物姿を纏う。ぱっと見では何処にでもいる高齢の女性、しかし確実に見覚えのある彼女は不機嫌そうにこちらにガンを飛ばす。例えるなら梅干しを口に含んだ時の如く渋い表情がピッタリか。だからその来訪者の正体に気付いた時、反射的に大きな奇声が喉を通り過ぎた。

「ば、ば、ばあちゃん！？」

「相変わらず落ち着きのない奴じゃのー。人に向けて指を差す奴があるか、この馬鹿たれが」

思わず狼狽を見せた為か、勢いよく飛びあがった物体Xは俺の頭を力の限り叩く。それはもう、パシーンと渇いた音が廊下中に響き渡るくらいに。後にして思えばこのせいで折角覚えた英単語を三つ程忘れたな、絶対に。

（な、な、な、な、な、何で此処に、ばあちゃんが居るんだ？確か合格発表の頃に来た筈なのに！？）

「まーったく、お前と来たら相変わらず抜けとっとるからな。受験の方も心配で気になって仕方ねえでねっか。とりあえず期間中はおれが手伝ってやっから、安心してお前は勉強に打ち込めばええ」

本来なら有り得ない出来事。

なんと――この時期にばあちゃんが一刻館に顔を出して来たのである。

ＰＡＲＴ４　縁は異なもの味なもの（後書き）

まさかの「黒木さん」＆「ゆかり」おばあちゃん登場となりました。彼女達は原作で合格発表（後）の時期に初登場するのですが、本来あるべき道と少しずつズレが生じて来ています。それ故に思わぬ人物がこの時期に？なんて事が今後もあるかもしれません。その辺はある程度の脚色としてお楽しみ頂ければと。尚、黒木さんのショートヘア設定はオリジナル。私が勝手に高校生位の頃はショートだったんじゃないか？との妄想で作りました。大学生になった暁にはシッカリとロングに戻っていますのであしからず。
それにしてもゆかりばあちゃんの強かさは扱い易そう。やはり年寄りは世間に揉まれた分の強さというのがないと♪原作で四谷さん達と宴会騒ぎを起こす姿は痛快でした。

※独自の解釈ですが五代君は教職で現国を教えていた事から文系向きに。黒木さんはどちらかというと理詰めで理系も悪くないかな？と。何せ部長の告白時ですら淡泊だったので、感情の起伏をコントロールするのが得意そう。ただ、あくまで五代君よりは、という話し。

PART5　桜前線

部屋に漂うお酒の匂い、足場の踏み場もないほどの雑踏、途切れる事のない笑い声、時間は深夜だというのに近所の迷惑も省みず乱痴気騒ぎとなっている一室。目を見張れば大の大人から年寄りに小さな子供、更には犬（惣一郎）までもがその場に集い宴に興じている。この時ばかりは無礼講とばかりに一刻館に済む住人達が羽目を外していたのだ。勿論一部例外もいるのだがそんな事を言うのは野暮というもの。

そう、今日という一日に限っては。

何故なら「五代君、大学合格おめでとう！」という垂れ幕が盛大に飾られていたからだ。

「いや～実に美味！祝い酒というのは格別な物ですな～」

「そうね～。ジメジメした雰囲気で飲むよりはマシかもね」

「あたしは嬉しい！五代君が合格してくれたお蔭でこんなに酒が飲めるんだから！」

「今日は遠慮しないでたんと飲んでくれ。孫の祝い酒だ、俺が全部奢ってやっから！祐作、おめえも早くこっちさ来て飲め！何たっておめえの祝い酒なんらからな」

「そうよ？主賓が脇でチビチビと飲んでても盛り上がりに欠けるで

しょ、早くこっちに来て一緒に飲みなさいよ〜」

「どうも五代君はそこの所が解っていませんからな。こういう宴は皆で盛り上がるからこそ愉しいんですよ？折角大学に受かったんですから盛大に祝わないと勿体ないでしょ。ほら、管理人さんもご一緒に」

既に出来上がった何時もの面子に加え、新顔の婆ちゃん。

何を隠そうこの老人、五代祐作（オレ）の祖母（ばあちゃん）で名を「ゆかり」という。

見かけに寄らず快活で口も良く回るし、かなりの酒豪で下手な若者など足下にも及ばないから驚きである。まあ、無病息災である点については素直に喜ばしい事で、俺の事を誰よりも心配してくれたのも事実。たまに人を驚かす癖があって傍迷惑であるのは兎も角として。

ただ――限度を超えて騒がれると少し気恥しくてコチラの肩身が狭くなるもの。

え、どうしてかって？それは誰だって身内の恥ずかしい姿を人に見せるのは憚れるものだし、いわんや好きな人の前だと尚更である。ぶっちゃけ物凄く気恥ずかしいのだ。

だからポリポリと頬を掻きながら申し訳なさ気に言うのが精一杯。

「あの、管理人さん済みません。婆ちゃんまで騒いでしまって、本当に」

「何を言ってるんですか、折角大学に合格したんですよ？それに私だってちゃんとお祝いをさせて欲しいというのもありますし、今日くらいは無礼講で騒ぐのも構いませんから。それよりもう空になってるじゃないですか、どうぞ」

「あ、どうも」

このさり気ない気遣いと気配り。一方で一升瓶掲げて胡坐をかきながら蟒状態の婆。お願いだからこれ以上、恥ずかしい姿を晒さないで婆ちゃん。孫として切なくなるから。

――に、してもだ……。

「さぁ～、今夜はパーと飲み明かそうか」

「やめろよな～かーちゃん、見っとも無いだろう。オレ、恥ずかしいんだからな」

「おめえ、管理人さんの犬にしては意地汚ねぇな」

「バウ？」

……――――いつにもまして今日の混沌ぶりが半端じゃない。というかおばさん、今更だけど酒の場に賢太郎を参加させるのは拙いって。おまけに惣一郎まで加わるってどういう事？誰だよ、連れて来たの。犬に酒飲ませんなよ、婆ちゃん！！

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

――――時を遡る事、一週間前。

「ホレ、たんと喰え。でねぇと本番で力(リキ)が出せねっからな」

婆ちゃんが気合いを入れて食卓に料理を飾る。見れば久しく口にする事のなかった家庭料理、実家の食堂を切り盛りするだけあって婆ちゃんも実は料理上手だったりするのだ。

ちなみに我が家(ごだいけ)の味噌汁は絶品、具は豆腐とワカメの定番だがそれだけに飽きも来ない。寧ろ毎日味わう物としてはサッパリしていて良い。おまけに周りを飾る献立は定番の漬物と焼き魚、そして煮物がまた何とも。

「それは有難いんだけどさ……、婆ちゃん、ちゃんとお袋と親父には一言説明してから来たんだろうな？特にお袋はこういう事に煩いし面倒事は嫌だぞ」

そう――俺が懸案する事項としてソレが気掛かりだったのだ。孫の心配をして様子を見に来るのは嬉しいけど、婆ちゃんは割と突発的な行動で周りをヒヤヒヤさせる。まあ筋はシッカリ通す人だから恐らく問題ないと思うけど。

「バカにするでねぇ！お前みたいなチャランポランとは違うわ。正月も帰省せず進路の相談も何もなし……まったくそんな調子じゃから心配で様子を見に来てやったというのに」

「うっ」

まさに正論。反論のしようもないオレは誤魔化す様に目を逸らす

と味噌汁を啜る。いや～ソレを言われると耳が痛くて。考えてみればオレって結構無責任？碌に連絡とかしない性質だったし。親も特に干渉してこないのをこれ幸いにと……。

ホレ、見ろ！と呆れ顔の婆ちゃん。御免、申し開きもないです。

「そうですよ？五代君。無碍に人の親切を踏みにじるのは感心しませんなぁ」

そして何時もの如く脈絡もなしに現れる四谷さん。どうやら朝食の匂いを嗅ぎつけたらしく、既に茶碗にはご飯が盛られていた。しかもご丁寧にその右腕にはマイ箸を持参する辺りは流石、婆ちゃんも当たり前のように飯を誘う所が馴染みすぎ。

まあ四谷さんも「遠慮」なんて言葉は元々持ち合わせていないし、婆ちゃんの喜ぶ姿に御茶を濁すのも憚れる。やっぱり人恋しくなる年頃なんだろうか？ん、なんかアットホームな光景になってきた。

しかしその気持ちが表に出ていたのか、二人の視線が残念な子をみるように変わる。

「急にニヤケたりしおって、薄気味の悪い奴め。そんな調子で今日の試験は本当に大丈夫なんじゃろうな？」

「まったくです。君は何時もそんな調子だから心配で堪らなくなるのですよ」

「うぐっ。わ、分ってるよ、今日の試験は本命だから俺だって対策はやってきたから！もう受験票や筆記用具も揃えてるし、後は身支度してから行くだけだって」

こんな和やかな朝食の一場面――だけど、それが力みを消してリラックスにつながるもので。

そして程々に腹を満たして一刻館を出ようとすると、玄関前で婆ちゃんは勿論、四谷さんや朱美さんに一の瀬のおばさん、そして何より響子から激励がきた。極ありふれた一言「頑張って下さいね！」や「一応合格を祈ってあげるわ」等といったエール、しかし心強い事に変わりはなく……。

――――――頑張ってきます！の掛け声と共に俺は、大学（たたかい）へと赴くのだった。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

ガラリと玄関を潜る音。それはもう訊き飽きる程に繰り返された行為で、そこに住む住人なら誰かの帰宅を察知するに充分な証拠。そもそも日が沈む夕暮れ時でこの時間帯に入って来る人間は一人しかいない。特に今日みたいな特別な日、ある浪人生が受験だった事。これらを顧みれば出てくる結論は自ずと明白。

そして、それを誰よりも待ち望んだ一人。このアパートの管理人が第一声を掛けるべく、パタパタと廊下を奔りだす。その姿は如何にもハラハラした焦燥と何かの期待を滲ませる。まるで弟の心配をする姉といった様相だ。

果たして曲がり角を超えて飛び込んだ姿は――「本日の主役」であった。

「お帰りなさい、五代さん。お受験御苦労様でした」

「あ、管理人さん。どうも、いや～流石にヘトヘトになりますね。でも手応えはバッチリでしたよ」

俺が一刻館に帰宅し直ぐに迎えてくれたのが響子の姿だった。やっぱり試験の出来具合が気になっていたのかな？でも大丈夫、それなりに確信をもって応えられる内容だったから。親指と人差し指を付けてＯＫサインを作ると、彼女も両の手を併せて安堵の笑みを見せてくれる。

そして虚を突いたのが次の一撃、これはちょっと予想できなかった。

「そうだ、まだ晩御飯は食べてないですよね？折角ですからご一緒しませんか？私もつい作り過ぎて一人だとキツイですから」

「はい？――あ、え～と……それって僕が晩御飯を一緒にって事……ですか？」

そう、なんと響子が自分からご飯を誘ってきたのだ。しかもコレって管理人室でって事になる。こんな夢みたいなシチュエーションがそう易々と転がりこんで来るものだろうか？だから思わず幻聴なのかなんて疑ったりした訳で。ビックリするなという方が無理。

「ええ、勿論そうですけど」

「……」

「あの、五代さん？もしかして……差し出がましかったですか？」
「あ！？いえ、とんでもない！謹んでお受けいたしますとも、是非！喜んで！」
全力全開で首を横に振る。当たり前だ、誰が響子の料理を食べる機会を棒に振るかっての。天地が引っくり返っても有り得んな。
「良かった。五代さん、全く反応しないからご迷惑かと思っちゃいましたわ」
「そんな事ありませんよ！管理人さんのお誘いを断るなんてそんな冒涜、僕がする分けなないに決まってるじゃないですか！逆に僕の方こそ頭を下げてお願いしたい位です」
「クス、それはちょっと言い過ぎですよ。でもお受験も一区切り着いたんですから、ちょっと労いもしたいかな？って。五代さん、あんなに努力してたじゃないですか。きっと合格（うか）ってますよ」
「か、管理人さん……」
あかん……身体が感動で震えてしまう。果たして『一刻館（ここ）』でこれほど人の優しさを感じさせる言葉が貰えるだろうか？否――絶対に無理だ。
プルプルと小刻み身体を震わせる仕種に響子も苦笑い気味だ。
それに気付くと俺も愛想笑いで何とか返すのがやっと。おまけに腹の音がタイミングよく鳴るもんだから余計、真っ赤か。なら何時

までも廊下で立ち話も間が悪いと言う事で、管理人室へと招待される事になった。

そしてテーブルの上を見れば、確かに一人で片づけるには多い量の料理。スタミナのつく肉料理がメインにデザートもソツがなく飾れている。香りからするとほんの少し前に出来あがった感じかな？きっと俺が帰る時間帯を考えて合わせてくれんたんだと思う。その労わりに涙腺がホロリと来るんだよなぁ。

だが――得てしてこういう場合は邪魔が入るもの。悲しいかな今迄の経験上でそれはもう予測済み、そもそも四谷さんや婆ちゃんの静けさが不気味だ。というか『一刻館』に住んでる以上はもう免れないといって方がいいか。

――……案の定、タイミングを計ったように、管理人室のドアがノックされると堤を切ったように雪崩れ込む人の数。

「あ～やっぱり！遅いと思ったらこんな場所で二人っきりで」

「怪しいですな。実に怪しい、いつから二人はそんな御関係に？」

「何だい、何だい。折角人が『残念会』の準備までしてたってのに、二人揃ってこんな所で逢引かい？やるんならもう少し場所ってもんを考えてくれないと困るねぇ」

「こ～の、馬鹿たれが！終わったんならさっさと報告にこんかい。おめえの事だからてっきり出来が悪くて、どこかに雲隠れしたんでね～かと心配したんらぞ」

ほらな、こうなると思ったんだ。ど～せね。

「――――で、手応えの方はどうでしたか？」

「まさか駄目でした～じゃないわよね？あんたにしちゃあ割と頑張ってたみたいだし」

「落ち込む事ないよ、五代君。あんたにはまだ来年があるじゃないか、一度や二度の失敗で挫けるなんてまだ早い！」

「失礼な。そんなに失敗した顔に見えますか？」

「なら、バッチリ合格（うか）ってる自信があるんだな？うちは浪人にこれ以上ムダ飯を食わすほど余裕はねーから、もし駄目だったら連れて帰るぞ」

「あの、皆さん流石にそれは言い過ぎじゃ」

受験から帰宅した俺を待ち受けていた一刻館の面々。だけど案の定というか、やっぱりというか、出鼻を挫く駄目出し発言の雨霰と、どさくさに紛れて婆ちゃんの一言も聞き捨てならない。普通の言葉を掛けてくれたのは響子だけというのが、ここの住人の性格を如実に物語っていた。

要するに――俺って随分信用ねーな、という結論である。

まあハッキリと結果報告をしていないのも事実、今回の試験に関して俺なりに感じた内容の方を伝えろという事なんだよな、結局。だからコホンと咳き込むと自信有り気に話す事にした。

「まだ結果通知が来ないと安心出来ないけど、一応は自信があります。解答の手応えはあったし、ケアレスミスもないか確認済みだしね。問題だって殆どが理解して解いてるものかりだよ」

それにホ～と梟のような返事。一応は感心してるのかな？口々にだったら合格祝い確実やら、勿体ぶるとは人が悪いやら、まあアレだけやれば落ちる方が難しいわね、といった褒めているのか貶しているのか微妙な反応がマチマチと。

そこへ、ふと一の瀬のおばさんが呟く。

「そういえばあんたの旦那はどうしてんだい？今迄顔見た事ないけど。こんな美人をほったらかして何考えてんだろうね」

「そうよね。管理人さんてもち、旦那いるんでしょ？こんな美人をほったらかす男なんている訳ないもんね～」

「えと……そうですね。私も一度報告しておこうかしら。今度行ってみる事にします」

どことなく口を濁す物言い、敢えて暈す言い方。

そんな響子の雰囲気を察してかどうかは解らないが、一の瀬のおばさんも朱美さんもへ～と返すのみだった。もっとも四谷さんはやっぱり居るみたいですね、と俺に只管プレッシャーをかけてくるが。

やっぱりもう少ししたら行くつもりだろうな。でも、あそこは響子だけでなく俺にとっても大事な場所だ。あの時の事は決して忘れられないし、何より貴方をひっくるめて響子を貰うと誓った場所だから。

少しだけセンチになった気持ちを仕舞い、今は現実に目を向けて感謝する事にした。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

――――そして現在。

「そういえばさ～、近所の人から訊いたんだけど、この周辺でテニスクラブが今、すっごい人気あるみたいなのよ。良かったら管理人さんもどうだい？あんたが一緒ならあたしも入りやすいしさ」

「あ～それ、あたしも訊いた事がある。何でも噂のコーチが凄い色男だってんでしょ？テニスの腕も中々だって専らの評判になってるわよ」

「でも、わたし管理人の仕事がありますし」

「いやだね、別に直ぐに決めろって分けじゃないよ。もう少し状況が一段落したらどうだい？て話しなんだからさ～。それにあんただって少しは他の事もやった方が気分転換になるだろう？」

「まあ考えるだけでしたら」

「――だそうですよ？五代君。これは聞き捨てならない話しだと思いませんか？もしかしたら管理人さんに言い寄る新手のライバル！なんて事も、ありえるかもしれませんよ」

「少し大袈裟すぎませんか？別に管理人さんなら声を掛ける人の一人や二人いたって不思議じゃないでしょ。それに通うって決まった分けでもありませんから」

テニスクラブのコーチか。おそらくあの人なんだろうけど、元気でやってる……考えるだけ無駄かな、そんなタマじゃなかったし。

「あらま。随分と余裕があるじゃありませんか。何か御進展でもありましたか？」

「だから、何で直ぐにそうなるんですか。僕はただそういう話しがあったからって、色恋を持ち出すのは飛躍しすぎだって言ってるんです。第一、僕は管理人さんを信用していますからね、そんな簡単に取り乱したりするもんか……ヒック」

なんだ？そんなに酒を飲んだ覚えはないのに、もう酔いが回ったような、……ッウ。思わず身体を支えきれなくなり、バタと倒れて薄らと残る意識の中で俺が見た物は、

「う～ん、少しアルコールが強すぎましたかね？何やら酔いが回り始めたみたいですし」

「たく情けないわね、コレ位で酔うなんて。男なんだからもっとビシッとしろってーの」

「本当にだらしない奴じゃな、これしきの事で酔うなんて」

「絶好調～～！！ちゃかぽこ、ちゃかぽこ♪」

「バウ！」

同じように疲れて眠っている賢太郎を除き、何時にも増してパワフルな面々と、プラスの婆と惣一郎さんが加わっていた事。そして柔らかい手でそっと頬を撫でる人影。それらを最後にプッツリと俺の意識は途絶えた。

どうやら一刻館の夜はまだまだ続くようである。

ＰＡＲＴ５　桜前線（後書き）

七月に入り猛暑もいよいよ本格化してきたこの頃。はっきり言って物凄くバテています。頑張って小説を仕上げようとしたのですが何と三日で５０文字という体たらく。エアコンや扇風機のない私の部屋では相当厳しかったんです。窓を開ければ虫が入って来るし、締めれば酸欠状態になりそうな蒸し風呂。入口のドアを開けて何とか状態。骨組みは終わってるのに肉付けの段階で頭がやられ全く書けない有り様でした。おかげで途中に友人の部屋で作成する始末。そんな中、我が家で唯一エアコンのある居間にてギリギリ仕上げました。何れ手直しなど入れますが拙い文にはどうかお見逃しを。

ちなみに今回は伏線として二つほど入っています。ああ、アイツやあの事か、と思って登場させる時迄ニヤニヤして頂ければ幸いです。そしてこれにて浪人時代は終わり、次からは大学生となった五代君へと突入します。もっともその前に伏線を一つ明かしますので先ずは管理人さんの方になると思います。テニスクラブのコーチはもう少し後にて（笑

そんな訳で皆さまもどうか暑さに負けず頑張って下さい。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8441r/

もどされて一刻館

2011年9月1日15時38分発行